

る！ 見るがよい！』

ゲーミング指輪よろしく色を激しく点滅させてみたが、市井において自己顕示欲甚だしい老人に好き好んで構う人間は居ない。

『それにしても退屈じゃ。読んだことのないめちゃんこ面白い本が読みたいのう』

こと禁書庫において識守の指輪が知らない本はないだろうに無理を言う、と周囲の魔物たちは呆れ混じりに笑った。

——ねえ聞いた？ “推し” って知ってる？

——人生が豊かになるやつよ。わたしは三百年前の王族カップルにハマってるの。

——推しはいいわよね、永遠に眺めていられるわ！

比較的年若い魔物たちの会話がソフオクレスの耳に入る。王国の歴史に登場する王族の一人にハマっており、その王と伴侶が出る文献を読み漁っている最中なのだと女性型の魔物は熱く語っていた。

——推しはいいものよ、人生を豊かにしてくれるわ。人生を豊かにもなにも、ここに居る魔物の大半は人生をすでに終えているわけであるが、そこに突っ込む

『なんぞ面白い本がないかのう』

リデイル王国が誇る古代魔道具〈識守の鍵〉は、ぼやいている。今日も今日とて机の上で暇を持て余す老人は、娯楽に飢えていた。

『退屈なのじゃー！ 叡智に満ちた吾輩は雑巾がけの見学などしとうないのじゃー！』

「黙らないと雑巾を絞るぞ、ソフオクレス！」

『老い先短い老人になんという仕打ち！』

容赦なく老人を一喝した主は、今日も禁書室の利用緩和に向けた清掃奉仕活動に励んでいる。七賢人を名乗るちよつとばかり魔法の達者な小娘が一緒なのが、ソフオクレスの気に障る。

装着したまま雑巾がけされることを拒んだ漆黒の指輪は、安置された机の上でピカピカと輝いてみることにした。

『黄色……青……おお！ 吾輩、七色に輝けるであ

魔物もまた存在しなかった。

『推し、とな？』

——ええ、識守の鍵には推しが居て？

推しとはどうやら人生を豊かにしてくれるものらしい。あのエピソードがいい、彼の伴侶が一緒だとお
良しと魔物の熱弁を聞き流す指輪の目に、一心不乱に
書架の整理をする主人が映る。

ソフオクレスにも魔物たちの雑談にも耳を貸さず、
一心不乱に仕事をこなす様が憎らしくも誇らしい。禁
書の納められたガラスケースの、曇りひとつ許さない
生真面目な主人だ。

推しという概念をなんとなく理解した老人に、魔物
はにんまりとほくそ笑んで推しシチュエーションを語
り始めた。

——いまハマってるシチュエーションはね——

『シ ril とモニカ of 性交しな い と出 られ な い 本 』

薄 い 油 膜 を 通 る よう な。 あ る い は 割 れ な い シ ャ ボ ン 玉 の 中 に 入 る よう な。

一 瞬 の 空 白 の あ と モ ニ カ の 目 に 映 っ た の は、 書 架 の 立 ち 並 ぶ 第 五 禁 書 庫 で は な く 新 し い 本 の ペ ー ジ の よう な 真 白 い 壁 だ っ た。

「 え っ 」

さ ほ ど 広 く な い 部 屋 に 扉 は 無 く、 モ ニ カ の 立 つ 床 は 木 の 板 で は な く 壁 と 同 じ 白 い 材 質 で 出 来 て い た。 何 が 起 き た の か も わ か ら な い ま ま、 部 屋 の 中 央 に あ る 寝 台 の 上 に 先 程 ま で 一 緒 に 作 業 を し て い た 人 が 横 た わ っ て い る の を 発 見 し、 モ ニ カ は 声 を 上 げ て 駆 け 寄 っ た。

「 シ ril 様 っ ！ 」

「 モ ニ カ …… ？ 」

幸 い に も シ ril の 身 体 に 見 て 分 か る ケ ガ は な く、 モ ニ カ の 叫 び 声 で 目 を 覚 ま し て く れ た。

「 良 か っ た、 シ ril 様 …… 」

「 す ま な い、 私 は 禁 書 室 で 作 業 を し て い た は ず だ が 」

「 は い、 私 も で す。 気 づ い た ら こ の —— 」

部 屋 に、 と 続 け よ う と し た モ ニ カ の 声 が 不 自 然 に 途 切 れ る。

「 …… モ ニ カ ？ 」

怪 訝 に 思 っ て 尋 ね た シ ril に、 真 つ 青 な 顔 を し た モ ニ カ が 震 え る 指 を 上 げ た。

「 あ、 あ つ、 あ …… あ れ …… 」

セ レ ン デ ィ ア 学 園 で 初 め て 出 会 っ た と き の よう な 震 え よう に、 シ ril は モ ニ カ の 指 す 方 向 に 視 線 を 向 け た。

シ ril が 見 た 先、 空 中 に 金 色 の イ ン ク で 浮 か び 上 が る 文 字。

『 シ ril と モ ニ カ の 性交しな い と出 られ な い 本 』

両 名 と も が 無 言 に な っ た。 ま ば た き を 二 度、 三 度、 さ ら に 唾 液 を 飲 み 込 ん で か ら 互 い の 顔 を ギ ギ ギ と 見 た。

「 あ の、 こ れ、 こ れ は …… 」

「 あ あ 」

こ の 現 象 に は 覚 え が あ っ た。 い つ ぞ や、 本 に 捕 ら わ れ た 庭 園 に 潜 っ た ば か り な の だ。 そ し て 禁 書 と は、 禁

書を作った者の課題をこなすことでのみ脱出が叶うことを、二人は身をもつて知っている。

「モニカ、魔法は使えるか？」

シリルの問いにモニカは半泣きで首を振った。先程から何度試してみても魔法が発動しない。通った油膜に全身が包まれているようだった。

「ご、ごめんなさいい……！」

「いや、モニカが謝ることではない。こんなふざけた禁書を作った人間が悪い」

モニカから見るとシリルはいつも通り冷静に見える。

だが、足元では靴先がトントンと音を立てていた。

その様子を、シリル様が苛立っている、仮にも七賢人を名乗っておきながらモニカが何の役にも立たないから、とモニカは解釈した。

「あつ、あのつ、シリル様！」

「どうした？」

「わたし、わたし、性交、大丈夫です……！」

二人のやりとりで反応しているのか、天井から柔らかな光が降り注ぐ。その光はまるで、観客が“がんばれ♡がんばれ♡”と囁くような、応援めいたぬくもり

を持っていた。

シリルの脳内でゴーンゴーンと鐘が鳴った、祝福ではなく頭痛の。

「……性交の意味を分かっているか？」

「はい！ 女性器と男性器を連結することです！」

「……」

シリルは眉間を抑え、はしゃいでいた部屋の照明はちよつと落ち着いたトーンになった。

どうしよう、間違っていないのに、致命的に合っていない。

「モニカ、残念だが、とても合っていない……」

「ええっ!!」

知識を間違つて覚えたことのないモニカにとって、間違っているとは捨て置けないほど衝撃的なことであった。そしてモニカは知っていた、知らなければ教えるを乞えばいいのだと。

「あ、あの、じゃあ教えて、もらえれ、ば」

頑張ります、から、とそこで流石に恥ずかしくなったのか、モニカの語尾がもごもごと口の中で消えた。男女が裸になって何かする、くらいの知識はあったの

だろう。

真っ赤になったモニカを見て、シリルは眉間ではなく口元を抑えた。

どうしよう、かわいい。

処女性に重きを置いたことなどないはずなのに、喜ぶ自分の浅ましさが嫌だ。助けを待つべきだと常識の片隅が訴えたが、誰にも邪魔されない密室で二人きりにされると、浅ましい下心が顔を出す。

「かわいい」

「!? ひえっ!」

細い身体を引き寄せて、ベッドに腰掛けたシリルの膝の上に乗せる。触れる体温に小さな肩が大きく跳ねた。

「好きだ、触りたい、結婚して欲しい」

甘い色をした柔らかい髪を梳いて、襟と首の間に指先を滑らせると、なめらかな皮膚の感触が指先に伝わった。

「すっ、すす、ふ、けけけ……っ!?」

「……」

モニカの顔はトマトよりも真っ赤で、思わず零れて

しまった端的すぎる告白を少なくとも嫌だとは思っていないようだった。シリルの膝の上で身じろぎするギクシャクとした動き越しに緊張が伝わって、堪らない気持ちになった。

「あ、あああの、あの、……嬉しい、です」

と、どもりながらもモニカは答えた。

鳶色を縁取る睫毛を啄ばむように、シリルは唇を寄せた。瞼に、鼻先に、頬に。震えた顎を持ち上げて唇に。

「ん、ん……、シリル、様」

柔らかな唇を割って入り込めば、モニカがシリルの胸元に爪を立てた。逃げようとする小さな舌を絡め取って薄く目を開く。文字通り目と鼻の先にある閉じられた瞼と睫毛が微かに震えていた。

「触つても、いいだろうか」

「……どどど、どうぞ!」

素直に乞えば、モニカが首がもげる勢いで頷いた。恥ずかしくて嬉しくて、抱き込んだ肩口に額に乗せる。布越しに感じる硬い骨、肩は薄くて強く掴めば折れてしまいそうだ。

「抱きたい」

髪に隠れた耳に唇で触れながら伝えた言葉は、自分でも呆れるほどの欲情を孕んでいた。ヒュ、とモニカが息を飲み、全身を強張らせ、そして少しというには長い沈黙の後にもう一度口を開いた。

「ど、どう、ぞ……」

震えた身体に体温を分けるように抱き締めて首筋に舌を這わせると、寒さ以外の要因でモニカが肩を震わせた。ブラウスを腕から抜いて、簡素な下着の下に指先を潜り込ませた。浮いたあばら骨を辿って肌に溶け込むような淡い飾りに触れば、尖った喉が上下する。

「ひ、……っ、ひゃ」

細い腕が視界の端で所在なく揺れていて、両手の指を絡めとって敷布の上にそっと押し倒す。沈んでいる胸の先端を尖らせた舌先でつついていると、それはやがてふつくと膨らんだ。柔らかかった胸の先端が舐めやすくなり、時折甘く噛みつかれて赤く色づいて唾液に濡れ光る様は淫猥だ。

上気した頬をシリルの肩口に寄せる仕草は稚い。

密着した下半身が反応をし始めていて、悪戯に腰を揺らして擦りつけると、ひん、と細い声でモニカが鳴

いた。

「は、はずかしくて、しにそう、です……」

身につけていた下着を全て取り払われるにあたって、モニカはようやくと性交が性器の連結だけではないことに思い至つたらしい。

敷布との間で潰されていたリボン解いて、白いシリツの上に広がる紅茶色の髪から漂う花のような香りをシリルは胸一杯に吸い込んだ。

「いい香りが、する」

「も、もらっちゃ、サシエで……ひえっ！ そ、そこ、だめです……！」

隙間なく閉じられているつもり太腿は、悲しいかな肉付きが足りないせいで容易く長い指の侵入を許した。両足の奥は少し触れただけでも温かく湿っていて、次々に溢れてくるぬるみを塗り広げ、小さな粒が主張してくる感触を確かめるようにシリルは触れた。

肩口に感じるモニカの息は不規則に途切れている。

猫の喉を擦るように芽の下を擦ると、高く裏返った声が上がった。

「ふあ、あ、あ、や……っ！」

薄い下腹を震えさせて、温かい蜜がシリルの掌に滴った。親指と人差し指で摘まむように擦ると、ひぐとモニカの喉が鳴った。

「は、あ、…あ！」

不慣れな反応からも性的な経験がないのは明白で、こたわるつもりなど全く無いのに嬉しくなるのは浅ましい男の性だ。嬉しい、触れることを許されていることが、何よりも。

余程だらない顔をしていたのだろうか、不思議そうにシリルを見上げたモニカが、シリルの胸元に指を伸ばした。

「あ、あの、シリル様、も」

脱いでくれませんか、と蚊の鳴くような声で乞われた。

言われて気付いてみれば、襟元はじつとりと汗ばんでいた。言われるままにタイに指を引っ掛けて緩めると、これまた何故だかモニカの顔が赤くなった。

「ひょえっ！」

「？……生白い身体で、すまない」

「そそそ、そんな、こと、ない、です……！」

真っ赤な顔を覆った両手の指の間で、鳶色の瞳が泳いでいる。

生白い身体だとしても、女性だけを裸にしているのわけにはいかない。上体を起こしたシリルがシャツや上着を脱いで落とすたびにモニカから悲鳴が上がった。所在なさげにシーツを搔いていた足を膝の上に乗せて、腿を掴んでそつと割り開く。

「そそそ、そんなところ、見ないでくださいいい！」

「見ないと危ないだろう」

開かせた両足の真ん中は赤く色づいて、稚い割れ目が濡れていた。

指先だけを内側に押し込めば、モニカはひやあと間の抜けた悲鳴を零した。ふわふわとした粘膜は熱く、シリルの指を喰い千切らんばかりの強さで締めつけている。狭隘な内側を指の腹で辿り、奥から湧く粘りを塗り込みながら、まずは奥まで進ませる。

痛い、とシリルが問えば、真っ赤な顔がぶるぶると振られる。

「出来れば、言って欲しい」

「……え、え」

「痛いとか気持ちいいとか、そういったことは、私にはわからない。我慢だけは、しないで欲しい」

肉体的にも精神的にも、彼女の方の負担が大きい。ならばせめても痛みや苦しさは除いてあげたい。出来る事なら気持ちよくなつて欲しい、それから快楽に濡れた顔を見てみたい。もしかしたら、モニカ自身も知らないのかもしれないけれど。

モニカは完全に固まっていて、小さな手を取つて、桜貝のような爪の先に唇を落とした。

膣口を弄る指を二本に増やし、頑なな粘膜を内側から広げようと蠢かす。深くに埋め込んで内壁をなぞりながら引き抜くことを繰り返す。モニカの唇から漏れる声は、呻きとも嬌声とも判断が付き難い。

「気持ち悪い、か？」

パタパタと飴色の頭が振られて、汗の粒が散る。

「あ……っ、あ、」

「モニカ」

薄く開いた唇が、何か言葉を発そうと震えている。そこから出ようとする音を、シリルは根気強く待った。

「おく、は……苦しく、て」

「うん」

「入口、の、ほう、が…」

「……ありがとう」

モニカの顔も首も血の気を透かして真っ赤になっている。随分と勇気を振り絞ってくれたらしい。居た堪れないのだろう、小さく身を竦ませているモニカに、シリルは再度口付けた。柔らかな唇と真珠のような歯列を割り、奥で縮こまっている舌を絡め取る。濡れた舌の感触も、狭い口内でくぐもった声も、この上なく甘かった。

奥深くを探っていた指を引くと、モニカはあからさまに安堵の息を吐いた。締めつけてくる内側の、入口付近をゆるゆるとなぞる。腹側の一際柔らかな粘膜を押したとき、モニカは全身を引き攣らせて声を上げた。

「ひう……っ！」

顕著すぎる反応に二人して目を剥いた。

特にモニカの方は、何が起きたのか分からない、という顔をしている。見た事のないその顔に腰の奥がジンと痺れた。

「だ、だめ……、や……っ！ シリル様……っ」

逃げようとする腰を引き寄せて、モニカが反応を示した部分に執拗に指先を滑らせる。きゅう、と粘膜がすばまって溢れた蜜がシリルの掌を濡らす。

気持ちいいだろうか、と耳朶に吹き込みながら問う。

モニカはぶるぶると首を振ってそれを否定したが、柔らかに蕩けつつある内壁も、震えて主張する花芽も、きちんと快楽を得ていることが明白だった。

「ふあ、あ、やあ……！」

粘膜を掻き混ぜる音が部屋に響いて、名残惜しく引き抜いた指に透明な潤みがとろりと滴った。モニカの膝はガクガクと震えていて、敷布の上で激しく呼吸を繰り返している。シーツの上に散った鮎色の髪、蕩けた鳶色の瞳、尖った胸の先端、あられもなく開かれた下肢は滴った体液でとろとろに濡れていて、指先で広げた入口から覗き見える粘膜が恐ろしく卑猥で美味しそうだった。

自分の下衣を緩めるだけの毎日している事に手間取り、取りだした屹立は腹につきそうなほどガチガチに張り詰めて反り返っている。薄紅い入口に丸い先端をあてがって、捏ねるようにぬちぬちと濡らしていると、

嚙んでいた口がひくりと動いて鈴口を食む。狭くて柔らかいそこが、陰茎を締めつける想像だけで出してしまうようになって、奥歯を噛みしめた。

入りたい。入れて、奥まで穿って、細い身体を開かせて、揺さぶって縫らせて、それから、それから。

「モニカ」

伸ばされた指先を握り込んで、白くなるほど噛み締められた唇に、触れるだけのキスをした。

脚を押して開かせる、ぐ、と腰を押し付けるとモニカの腰が微かに浮いた。

「あ、あ、……っ、んん……！」

くぶ、と水音を立てて先端が沈む。

尖った顎が反らされて、飲み込みきれない唾液が零れて落ちた。顰められた眉の下、とろりと蕩けた目は、見たことが無いもので。普段の表情との差がシリルの下肢を刺激する。

先端だけを含ませた状態で先程の場所を擦るように腰を揺らせば、汗ばんだ腿が緊張して強張るのを掌で感じた。

「……気持ちいい、だろうか」

打ち振られた飴色の髪がパタパタとシーツを叩く。

「シ、シリル様、は……」

「？」

「シリル様、は、気持ちいい、です、か……？」

濡れた肉の輪がきゅうきゅうと屹立の首を嚙んでく
るのが堪らない。膨らんだモニカの花芽を指で柔らか
く刺激しながら、裏側の粘膜を先端で押し上げてやる
と締めつけが強くなった。長く尾を引く声を上げてモ
ニカは全身を痙攣させた。

「あつ、あ……や、い、あ、あ……！」

芽を摘まんだ指の下から少しずつ痙攣が始まり、陰
茎を含まされたままの薄い腰がガクガクと揺れる。先
程よりは薄い、けれど粗相のように蜜が滴り落ちて繋
がった部分を濡らしていく。

苦しいのだろう、白い指がシリルの手の甲をカリカ
リと引つ搔く。切実さを持って動くその指をシリルは
いなして、さらに体重を掛けた。

「つい、あ、あ、つ……！……！」

モニカの目尻から今度こそぼろりと大粒の涙が溢れ
た。舐め取ったそれは微かにしょっぱくて、罪悪感が

疼く。

でも、奥まで入りたい。柔らかくて狭くて、熱いそ
こに。奥が苦しいのは聞いたから、それならモニカが
一番気持ちいいところが、きつと一番いい。

逃げようとのたうつ腰を押さえつけて、狭隘な内側
をゆつくりと進む。奥から溢れるぬめりと先走りを頼
りに閉じた粘膜をこじ開ける。

ぶるぶると震える白い腿の中心で、充血した入口は
限界まで開かれて脈打つ屹立を咥え込んでいる。視覚
からも興奮が増して、比例して嵩を増した陰茎にモニ
カが甘く鳴いた。

「……モニカ」

気の利いた愛の言葉ひとつ思いつかないかわりに、
瘦躯を抱きしめる。繊細に蠢く奥がきゅうと締まって、
モニカの中で一番狭いそこに熱を吐き出した。

「あ、あつ、あ、う」

内側で爆ぜた熱を擦り込まれる様に腰を動かせば、
引き摺った足先が何度も跳ねる。震える指先が縋るよ
うにシリルの肩に爪を立てた。

「シリル様、シリル様あ……っ、すき、すきです」

涙に濡れたモニカの目に、欲情に塗れたシリルの顔が映っている。舌足らずに言葉を紡ぐ唇が愛しくてたまらない。

どこかでガチャリと鍵が開く音がしたが、無粋なそれを意図的に聞き流した。もっと、と音も無くねだった唇に、シリルはもう一度口付けた。

机の上でソフオクレスは目を覚ました。

禁書庫の床で抱き合って眠っている二人を見つめて呟く。

『ふむ。推しとは、つまり愛じゃな。ただし、少し面倒くさいタイプのやつじゃ』

勝手に納得した識守の鍵の言葉を、周囲の魔物は誰も否定しない。代わりに、ソフオクレスの主がむくりと起き上がった。

『おお、良い夢が見られたかの？』

シリルは寝ぼけ眼のままに、自慢げなソフオクレスを雑巾がけのバケツに叩き込む。

やらかした老人の悲鳴を受けて、禁書庫の光が染し気に瞬いた。

あとがき

魔術師はサイコロをふらないⅡ開催おめでとうございます！
枯れ木も山の賑わいになれば嬉しい突貫シリモニすけベブックです。
あまりエロくなくて大変申し訳ございません。

すけベブックにラブリーな表紙を添えてくれたのはにびさんです。
落とせない理由を作ってくださいマジありがとうございます。
表紙デザインかめのこさん、作業通話大変たすかりました。
このコピー本は友人の皆様のお力で出来ています。
シリモニに幸あれ。

おくづけ

シリルとモニカの性交しないと出られない本

2025.11.1

魔術師はサイコロをふらないⅡ

発行:生ハムグリッシーニ
まつおれに(@renimatu)